

龍門石窟古陽洞の開鑿年代（下）

北魏孝文帝の洛陽遷都以後と見做す
現行の通説の誤謬を正す

上原 和

四、古陽洞を訪れた日本人先覺者による 調査報告

- 1 明治二十六年（一八九三）、日本人として
初めて龍門を訪れた岡倉覺三

日本人の研究者で、初めて龍門を訪れたのは、明治二十六年（一八九三）、清朝の光緒十九年九月十九日、当時東京美術学校長をしていた岡倉覺三（一八六一—一九二三）

雅号天心であり、岡倉の中國美術調査のための五ヶ月近い清國出張は、⁽¹⁾岡倉が理事を兼務していた帝國博物館（宮内省）からの命によるものであった。当年三十二歳。岡倉は明治二十三年（一八九〇）五月に設立された帝國博物館の理事及び美術部長に就任、同年十月に東京美術学校長に任命されている。

現在、当時の岡倉自筆の『清國出張手記』⁽²⁾（假題）が、日本美術院に所蔵されているが、幸い同院の厚意により閲覧することができた。透けるような薄い白色の正方形の和紙（雁皮紙）を、五十数枚重ねて横に半折し、折り目を糸で綴じた手帳が四冊あり、測ってみると、片面の横幅は

21・6センチ、縦は10・8センチあった。その第一分冊に、表題もなしに、

明治二十六年七月十一日

清國出張ノ命（ア）リ

十五日夜新橋ヲ発ス早崎

梗吉草津より伴随ス

から始つて、同月二十日午後三時に、「長崎江戸町鶴谷利七方着」の最終行まで、十四行にわたつて、連日のメモが墨書されていた。なお、伴随者の早崎梗吉は、当年二十六歳、当時東京美術学校絵画科の学生であり、写真術を習得しており、また中國語にも堪能であつたという。岡倉一行は、長崎を船で発ち、韓國の仁川を経て、八月二日に山東半島の芝罘ちいこうに着き、清國の土を踏んでいる。

龍門訪問の記事が現れるのは、第二分冊の九月十九日の日付けのある頁から、第三分冊の初めにかけてであるが、九月十九日の朝、西安府を目指して洛陽を發つ当日の予定を変更して、南郊の龍門を訪ねることになつた事情が記されているので、初めの部分を行を換えずに写しておこう。

「九月十九日、快晴、六時超 徐某ヲ訪ハントし門を出テントシテ紹介書ヲ見レバ河南府城ト見シハ河南省城の看

明治二十六年七月十一日
清國出張ノ命
十五日夜新橋ヲ発ス早崎
梗吉草津より伴随ス
十八日午後三時三ツカ五陸
天明舟ヲ乗テ山ノ向フ
午後三時再ト三ツカ五陸
十九日午後一時三ツカ五陸
泊一四時五十分九時
道ニテ性多クツカ五陸
飼大塚ニ至リ直ク東ヲ
僅して草津ニ至ル
三時最後ノ行
行佐々ニ出テ
初十時

挿圖 明治二十六年「岡倉覚三清國出張手記」七月十一日 新橋出發 第一分冊第一頁

誤リナルヲ知ル 大二笑テ罷ム 直チ二馬車ヲ賃シテ西行セ(ン)ト欲スルニ遠行のものなし 則チ香山寺等ヲ見ルコトニ決シ午前十時頃南関ヲ出テ先ツ龍門ニ至ル 路程二十五里 兩山伊水ヲ挟ミ香山寺の崖上河を隔テ高キ八寔ニ好シ 乾隆の御遊モ宜ナルカ 先ツ龍門の伊闕ニ上ル(傍点は筆者)。

岡倉が日帰りの行先として龍門を訪ねたのは、唐代の詩人白居易(字は樂天)に由縁の深い香山寺の跡を見るためであった。『旧唐書』巻一六五白居易伝³⁾よれば、晩年香山寺僧如滿と親しく往来し、自ら香山居士と称し、没後は香山如滿師塔の側に葬るよう遺命したという。自らも漢詩を作した天心は、長恨歌 や 琵琶行 の詩人に想いを馳せながら龍門への道を急ぎはしなかつたであろうか。当時の岡倉は、龍門の伊闕に上るまでは、ついで龍門に北魏から唐代にかけてのおびただしい数の石窟が開かれていようとは、思つてもみなかつたのである。伊闕の西山で、初めて潜溪寺の右辺の石洞内に入つた岡倉は、「諸仏の妙創忽チニして喜歡の声を發セシム」と感嘆して、洞内の規模や諸仏像を観察している。次いで、「登レバ三洞アリ 中央ニ寶陽洞ト題ス 中央八明ラカニ古式ニシテ烏仏師のもの

と毫も異ナルコトナシ 北魏のものか」と記している。

第三分冊は、「龍門山 伊闕ノ碑ヲ見テ寶陽ヲ出ツ」の初行から始まつているが、(山房ノ人粥ヲ与フ 飢ヲ医セリ)という傍書が見られるので、すでに時間は午後に入つていたものと思われる。次いで、「南の方山ヲ廻レ八大巖屈アリ屋落チテ横十六七間奥行二十間モアリ」として奉先寺洞の現状が記されているが、洞名は記載されてなく、また盧舎那仏坐像についても「釈迦石造高肉四五六丈モアルへし(略)実ニ唐時の奇觀なり 屋落チ土多く堆シ足部半は没セリ」と結んでいる。続いて古陽洞であるが、洞名は記されていない。全文 を写しておきたい。

其南又一洞アリ

三尊仏獅子アリ 仏は

新彩色アリ 他の仏像

数千北魏のものタルヤ疑なし

(二枚目)

摺物アリ

此処 最も長細き

觀音と似タリ 是亦

弥勒菩薩交脚
像のスケッチ

北魏のものか

星魏永平十三年杯の題字アリ

三千仏最モ奇古ナリ

塔アリ 人物アリ

武梁祠後此石室ナリ

ト云フヘシ 神仙数多因果

経ト能ク似タリ

此古(陽 脱字)及實陽の中洞最

モ古ク最モ觀古の料多シ

實に得難きの一摺物アリシ

既ニ薄暮ナルヲ以テ止ムヲ

得ヌ洞ヲ出ツ他日考古

の人必ス一登スヘきの價

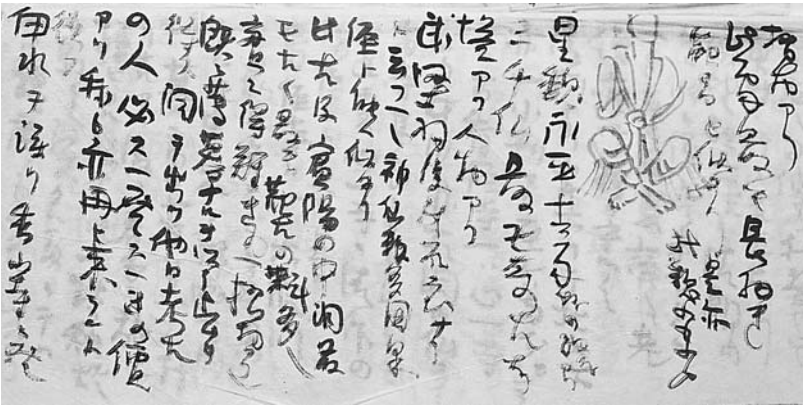
アリ我モ亦再ヒ来ラント

欲ス

伊水ヲ渡リ香山寺ニ登

ル

岡倉は、古陽洞内の北魏仏像数千の壯觀さを、武梁祠、
すなわち山東省嘉祥県にある後漢の武梁祠堂の画像石以來



挿圖 明治二十六年「岡倉覚三清国出張手記」九月十九日 龍門石窟古陽洞
第三分冊第二頁

のものである、と讃歎している。岡倉が幾枚もの拓本の上でこの石室の画像を見ていることは、彼の日誌の第一分冊の裏に、北京で購めたと思われる古書類の中に「山東武梁祠石刻」の名が挙げられていることから察せられる。

また、岡倉は、「此古陽及び賓陽の中洞最も古く最モ観古の料多し」と記しているが、古陽洞の名を知ったのは、洞内の側壁に大きく、古陽洞と陽刻され、白く塗られていたからである。岡倉が西山の南端に近い古陽洞を訪れたのは、夕暮近くであり、午前中であれば明るい陽ざしが洞内いっぱい溢れ、容易に南壁中央の「太和七年孫秋生造像記」の碑銘を読むことができたのにと惜しまれる。

なお、岡倉は、此処で最も長細き観音と似ている、として、手早く側壁第二層の列龕内の弥勒菩薩交脚像のその瘦身の坐像のスケッチをしているが、岡倉が、「此処 最も長細き観音と似たり」と記しているその長身の観音は、おそらく法隆寺金堂の百済観音菩薩像（明治二十一年の美術取調の際の呼稱で言えば、朝鮮風観音木像、七尺）を想起していることと思われる。ちなみに岡倉は、賓陽洞においても「中央八明ラカニ古式ニシテ鳥仏師のものと毫モ異ナルコトナシ」と述べ、法隆寺金堂の本尊と比べている。

ところで、岡倉の手早いスケッチといえは、私は二十年前にも、やはり日本美術院に所蔵されている明治十九年（一八八六）五月七日の日付のある『奈良古社寺調査手録』の法隆寺夢殿開扉の際の救世観音菩薩立像のスケッチとメモを閲覧させて戴いたことがある。表紙を欠いた、粗末な藁紙の洋綴無罫の小型ノートいっぱい、幾重にも巻かれてあった白布が解かれてその全貌を現したばかりの本尊の姿が描かれていた。そして 夢殿 と見出しが書かれた頁には、「秘仏観音 保存妙ナリ」とのみ記されていた。

夢殿がいつ開扉されたか、については、同行者のアーネスト・F・フェノロサが遺著『中國と日本の美術の諸時代』(Epochs of Chinese and Japanese Art, 2 Volumes, London, 1912)⁽⁶⁾の「一八八四年（明治十七年）の夏」と記しているので、明治十七年説が久しく定説となってきたが、岡倉のこのスケッチに徴する限り、夢殿の開扉年は、明治十九年五月七日であり、フェノロサの記憶違いから生じた誤りと云えよう。なお、明治十九年の法隆寺寺務日記にも五月七日に文部省御備人米國フェノロサ氏全圖書取調掛り岡倉覺三氏外が来山した旨の記載が見られる。

ちなみに、岡倉は、明治十一年（一九七八）八月にフェ

ノロサがお傭い外國人教師としてアメリカから来日し、開設二年目の東京大学文学部で政治学、理財学を講じた際の最初の学生であり、十三年の七月に卒業、九月にフェノロサが関西の古社寺を訪ねた折に、通訳として同行している。フェノロサは当年二十七歳、岡倉は十九歳であった。翌十月に岡倉は文部省に就職している。それ以来、日本及び東洋の美術を熱愛する兩人の友情は、公私の上で深く結ばれるのであるが、なぜ岡倉が、欧化主義の風靡する世相なかで、あえて清國へ長期の美術調査に出かけるのか。若き日にフェノロサとともに抱いた東洋美術への熱い想いと無関係ではないように思われる。

なお、夢殿開扉のあつた明治十九年の文部省によるフェノロサ・岡倉の古社寺調査の後、年譜によれば八月一日にはフェノロサは帝國大学雇いを辞任、文部・宮内両者の雇いとなり、九月十一日、岡倉は美術取調委員としてフェノロサとともに欧米出張を命ぜられ、翌二十年十月十一日に歸國、十月四日に開設された東京美術学校の幹事、十二月二日にフェノロサも東京美術学校雇いとなっている。

こうして明治二十一年（一八八八）五月、宮内省図書頭九鬼隆一を主班とする大規模な近畿一円の美術取調に岡

倉・フェノロサも随行し、六月八日から十月三日まで法隆寺の宝物の調査に当つている。前述の法隆寺金堂の朝鮮風木像の命名も、フェノロサ・岡倉兩名によるものである。

このときの美術取調が発展して九月に宮内省に臨時全國宝物取調局が設置され、翌二十二年に改称された帝國博物館が東京・京都・奈良に設立され、岡倉は、東京美術学校と東京帝國博物館双方を擔つて行くのである。後年、清國を訪れ、龍門石窟を調査する伊東忠太、塚本靖、平子鐸嶺等がいずれも岡倉ゆかりの人たちであることを思うと感慨を禁じえない。

2 明治三十五年（一九〇二）、伊東忠太による龍門石窟の調査

岡倉覺三の清國美術調査から数えて九年後の明治三十五年（一九〇二）三月、当時東京帝國大学工科大学造家学科の助教であった伊東忠太（一八六七—一九五四）は、教授昇任前の慣例である欧米への海外留学を、前例が無いとの理由で難色を示す教授たちを説得して、中國・印度・土耳其古への三年間のアジア周遊の旅に出かけている。

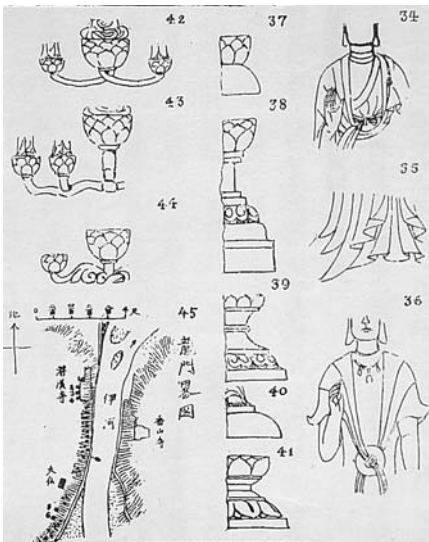
こうした伊東忠太の、欧化主義の風靡するなかでの熱いアジアへの眼差しは、日本建築史を研究する者としては当然のこととはいえ、やはり岡倉覺三のアジア主義に共鳴するところあつてのことであることは、本人自身の談話からも知られる。伊東は明治二十五年（一八九二）七月、工科大学卒業とともに、大学院に入学、法隆寺建築の研究に専心するのであるが、翌二十六年二月に、岡倉覺三が校長をしていた東京美術学校の講師として建築裝飾術の授業を囑託されている。岡倉と親しかつた伊東の大学在学中の小島憲文教授の嚮導によるものだという。

伊東は、明治三十五年三月二十五日に東京を出発し、中国、印度、土耳其をめぐり三十八年六月に帰國しているが、最初の訪問地中国には、清朝の光緒二十八年の四月某日、北京に着き、六月一日に北京を発し北清の建築を調査しているが、大同へ行った際に、偶然に雲岡石窟を発見している。

龍門石窟については、帰國二年後の『支那印度土耳其旅行談』(第二回の下)の中で語られているが、龍門では僅か三日間調査した斗りというだけで、古陽洞については、「大佛窟からは南へ進むと路は西南に彎曲し始め、龕は次

第に減少しますが終りの部分になほ二つの重要な窟があります、その内に建築的手法の面白い浮彫があります」とのみ語られているだけで、洞名の記載すら見られない。しかし附図の仏像の衣紋をスケッチした三例の一つに、明治二十六年に岡倉覺三が龍門を訪ねた際に手早く描いた古陽洞の弥勒菩薩交脚像の上半身が掲げられている。

なお、伊東は昭和十八年（一九四三）に刊行された『東洋建築の研究(上)』所収の「支那建築史」において、巻



挿圖 明治三十五年伊東忠太、清国出張「支那印度土耳其旅行談」附圖

頭のグラビアに、当時二十一窟と呼ばれていた古陽洞の附図として写真四枚を掲載しているが、その第一枚目には大和七年孫秋生造像記の碑銘のある南壁第三層の中央が写っている。そして本文（一七〇頁）において次のように述べている。

「建築的立場より見て、其の最も重大なのは第二十一窟である。此の窟は少くとも大和七年には進工せられ、大和十九年頃に完成せしものであることは窟内の銘に由つて明瞭であり、雲岡の第二區の石窟と同時代であらねばならぬしかも其の壁面は建築的意義の的確明瞭なる彫刻を以て充塞されてゐるのである」

当然、自分の眼で、南壁中央の「大和七年孫秋生造像記」を読んだ上での大和七年開鑿説であり、大和十九年頃の完成と目している点、景明二年造像銘のある邑子像碑文との混淆は見られない。前頁にもこの大和七年銘に徴して、「即ち龍門は北魏が未だ洛陽に遷都せざる以前において既に開鑿されたので」という記載があることも、併せて書き添えておく。

3 明治三十九年（一九〇六）、塚本靖・平子鐸嶺による龍門石窟の調査

次いで、明治三十九年（一九〇六）、清朝の光緒三十三年十一月に、東京帝國大学工科大学造家学科教授の塚本靖（一八六九—一九三七）と、帝國博物館囑託の平子鐸嶺（一八七〇—一九一一）の兩名が、龍門の潛溪寺に十六日間宿泊し、龍門石窟を調査している。なお、この清國への調査旅行に塚本と同僚の助教関野貞も同行していたが、旅を急いで龍門で別れ、西安府へ向つている。

ところで興味深いことに、塚本は、岡倉覺三が清國へ出かけた明治二十六年の九月、前年から東京美術学校で講師をしていた伊東忠太が、恩師の木子清敬の推薦で平安遷都記念殿平安神宮造営の技師を委嘱されたので、その後任として美術学校で建築裝飾論を担当することになり、他方平子も、同じ時期に東京美術学校の日本画科に在学していたのである。塚本はその年の七月に東京帝國工科大学造家学科を卒業したばかりであった。ともに若い二人が、岡倉の歸國後の清國旅行談にどれほど感動をおぼえたか、十

分に察せられるのである。

明治三十九年九月から翌年一月まで約半年にわたった、塚本靖らの清國河南・陝西二省の調査旅行については、歸國の翌年、塚本が『東洋學藝雜誌』で語った「清國內地旅行談」⁽¹²⁾があるが、名所旧跡、風俗習慣などの見聞記であり、龍門については、晩唐の詩人白樂天の墓のある香山寺の名は見られるものの、石窟に関しては、洞名の記載すら見られないのであり、僅かに、「唐の高宗の造られた高七八十五尺の大盧舎那佛」の名が挙げられているばかりである。むしろ学術的には、二十年後に雑誌『太陽』に発表された「雲岡と龍門」⁽¹³⁾がすこぶる貴重である。なお、雲岡に関する記述は、龍門訪問より三年後の明治四十一年（一九〇八）樋口貞藏を伴って、雲岡石佛寺に泊すること八日間の調査によるものである。

龍門については「伊闕の西の山が龍門山で、東の山は晩唐の詩人白樂天の隱棲した香山寺である」と、まず最初に白樂天の香山寺の名が現れるのは、岡倉の龍門訪問の動機が、この香山寺詣りにあったことが想われ、若き日の塚本・平子らに与えた岡倉の薰陶が偲はれるのである。とりわけこの建築学者について感嘆に堪えないのは、龍門に関

する漢籍にすこぶる詳しいことであり、往年の岡倉の清國における漢籍の涉獵を想わせるのである。

その圧巻は、元代の薩天錫の『龍門記』を読み、實陽洞から南へ老君洞等へ至る間の十余の大洞と、路傍より数十尺の崖頭まで数層にわたって開鑿された崖面の大洞小龕の諸石像が、ただ萬を数えるばかりでなく、それらに古い亀裂や、人為的に首が砕かれたり、鼻や耳や手足が欠けたり、或いは金碧の裝飾が悉く剥落して、完全なものが鮮い、という文面に接し、塚本自身も崖頭の人の達し難い処まで登り、「仔細に検^{しら}べて見ると、佛像の衣紋の凹所に猶^{なほ}群青、緑青、朱などの痕跡が僅かに存している」と記している糸である。私は、塚本の実証的精神と探究心に深い感動をおぼえる。

ではなぜ、元代において、既に斯様に石像の多数が毀損していたのか。塚本は、後周武帝建徳三年（五七四）、唐の武宗會昌五年（八四五）、明の世宗嘉靖元年（一五二一）等の滅法の結果だと信じる、と断言している。「此滅法は佛道を廢し、浮屠を毀^{こぼ}ち僧尼を還俗せしめた位徹底したものであった。当時大都會の洛陽に近き龍門の佛像が、此等の時に何等滅法の厄を蒙らなかつたとは信ぜられぬ」と述

べている。

他方、老君洞、すなわち古陽洞の場合はどうなのか。塚本は、「此洞内の諸像が他の諸洞よりも製作年代が古いにも拘らず、最も完全に残っている理由を忖度するに唐の天子は李姓であつて、老子の後裔なりと信ぜられて居つた為に、道教を信ずる事が篤かつた。此洞内の本尊を老子だと称したのは寺僧の上に媚^{こび}の結果か、或は又後世の滅法を予想したものか」と推測している。老君洞という通称どおり、一九六五年に釈迦本尊の元の姿に戻るまでは、太上老君の像として加飾されていたのである。

なお、この古陽洞が開鑿された年代についてであるが、塚本は「北魏の景明の初め（五〇〇年）に、代京の靈巖寺（雲岡石佛寺）に準じて高祖孝文帝と文昭太后の為に着手された寶陽洞開鑿以前に、既に龍門に石窟の開かれて居つた事は、洞内の銘文によつてわかる。即ち現在諸洞中最も古きものは老君洞である。洞内には景明元年を遡る事十数年の太和年間の銘が現存しているのである」と述べている。

孝文帝の洛陽遷都のあつた太和十七年（四九三）よりもさらに遡る年代をもつ太和年間の造像銘としては、太和七年（四八三）に地元の功曹孫秋生・劉起祖に率いられた二

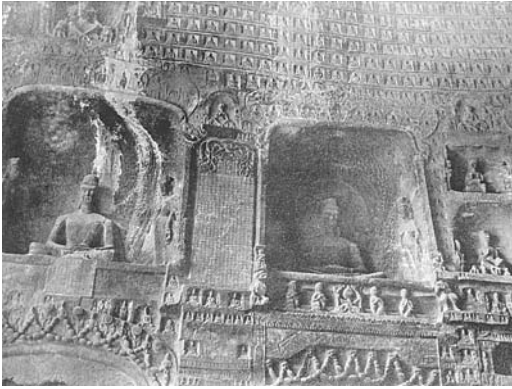
百人等によつて石像一區を敬造したという洞内南壁中央の造像記が唯一である。この石像一區が、正壁の本尊を指していることは云うまでもない。

注目すべきことに、塚本は、龍門石窟の銘文に関して、次のような問題提起をしている。

「爰に一の疑問とすべきは雲岡には殆ど銘文を缺き、及龍門の寶陽洞、鑼鼓洞等に銘文なく奉先寺に銘の少き事である。私の考へでは勅願によつて造られた洞窟、佛像等には他の佛像信者が其餘地等に小龕を穿ち佛像を刻み銘文を附する等の事をせなからである。或は之を禁じられて居つたのかも知れぬ。勅願でない洞には後から後からと秩序もなく其餘地に佛像及銘文を刻み、甚しきは先人の刻した佛像銘文を削りて其處に自分の佛像及銘を刻んだ例もある。或は下の銘仏像が半分削り残されて居るのを見る。」

まさしく塚本の言つ、勅願でない洞の無秩序な雑然とした状態は、古陽洞の両側壁第三・第二兩層の四つの列龕の周圍にも、穹窿形天井にも見られるのである。

さらに、この明治三十九年における塚本の龍門石窟調査における掛け替えのない現地報告は、本人によつて撮影された諸洞内の写真の数々である。とりわけ古陽洞内につい



挿図 明治三十九年古陽南壁中央（塚本靖撮影）

ては、その後間もなく側壁の列龕内の諸像が人為的に破壊、掠奪されているので尚更である。水野清一・長廣敏雄著『龍門石窟の研究』に、古陽洞内の塚本撮影の写真四枚が収録されており、その一枚の「古陽洞右壁上層図（第九十二図）に、南側壁第三層の第一・第三列龕の間に、横額状の 太和七年孫秋生造像記」と、その上下に二分された、

第二列龕内釈迦坐像の 景明三年邑子像造像記 を見ることが出来る。両者の書式や行数の相違はもとより、同じ方筆とはいえ、その優劣まで見て取れるのである。破壊以前の景明三年造龕内の釈迦坐像の全貌が見られ

る点からも、すこぶる貴重である。

次いで、塚本に同行した平子鐸嶺ついでであるが、『長安洛陽佛蹟探検手記』と書かれた箱に収められた手帳三冊¹⁵が、現在、東京藝術大学附属図書館に貴重図書として所蔵されている。同館の厚意により、本稿執筆中二回閲覧することができたので、内容の概要を記しておきたい。なお、三冊ともに黒褐色の表紙の方眼の野のある約六十頁の手帳であるが、第一分冊と第二分冊は同型（横幅一三・五センチ、縦二〇・五センチ）であるが、第三分冊はやや大型（横幅一六・五センチ、縦二〇・五）である。

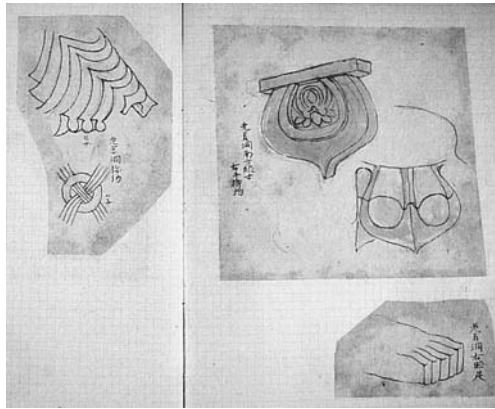
第一分冊は、鞏県石窟寺の平面図や佛龕の化生菩薩・格天井のスケッチなどから始まっている。鞏県は漢魏の洛陽故城の東四〇キロ、伊水と黄河の合流点に近く、清代には河南府に属していた。石窟寺の造営は北魏の宣武帝景明年間（五〇〇・五〇四）と目されている。河南府の城壁や門のスケッチも見られる。第二分冊には、最初の数ページに場所不明の龍頭など描かれているだけである。第三分冊は、すべて龍門石窟の各洞の佛像や裝飾文様などのスケッチで満されており、開巻一頁には賓陽中洞の本尊の仏頭が大きい



挿図 明治三十九年古陽洞太上老君像
(平子鐸嶺筆)

く墨筆で描かれ、その裏の頁に霜月廿日の日付けが記され、「龍門の水に浴して窟の尺迹に香たてまつる」と詠まれている。

古陽洞については、老君洞本尊と傍書された、本尊の肩から上の顔のスケッチ その右下に台座に結跏趺坐した本尊の全容が描かれている。加飾された太上老君の顔ではあるが、釈迦仏の原像の面長の顔目鼻立ち、高い肉髻はかなり良くとらえている。また、ノートには、和紙に淡く彩色された洞内仏像の細部のスケッチが貼付されており、なか



挿図 明治三十九年古陽洞内仏像細部（平子鐸嶺筆）

ていることであった。

平子のこの龍門石窟調査ノートには、寶陽三洞はじめ十九の洞名が見られるが、平子が最も感動を覚えたのは唐代の奉先寺洞であろうか、大盧舎那佛像の顔の見事なスケッチ、測量値を書き入れた平面図とが、それぞれ真いつばいに書かれている。また老君洞より更に南にある長身観音洞

でも興味をおぼえたのは、明治二十六年に岡倉覺三が龍門で唯一スケッチした弥勒菩薩交脚像の、腹部の上の円環内でX字状に交差する帔巾と、交脚の膝を覆う下裳の平行衣褶線が描かれ

(現在の名称は路洞)にも回り、平面図とともに、法隆寺の百済観音菩薩像に似た、長身の頭部を欠いた脇侍像の素描に寸法まで書き込んでいる。

なお、平子は清國から帰國後、主に龍門石窟を論じた平子鐸嶺稿『洞窟古年考亮』(故佐伯啓造氏蔵¹⁷)を執筆したとのことであるが、遺族に照会してみたが、所在不明であった。平子が病没したのは、帰國後五年目の明治四十四年(一九一一年)五月のことである。

4 大正七年(一九一八)における関野貞の龍門石窟再訪

次いで関野貞の龍門訪問についてであるが、もともと明治三十九年の塚本靖の清國訪問は、同僚であった関野貞との二名の出張であり、平子の懇請により三名同行の旅となつたが、龍門に到着するや、関野は塚本・平子と別れて西安府へ向つている。よほど慌ただしかつたとみえて、このときの龍門石窟の見聞については、帰國直後の講演¹⁸においては、唯一唐代の奉先寺の盧舎那佛の大像を、奈良の東大寺の大佛と比較しながら紹介しているばかりである。

さらに関野は、十二年後の大正七年(一九一八)二月、官命により、三ヶ年にわたつて朝鮮・中國・印度の各地を歴訪しているが、中國では民國七年(一九一八)の年内に龍門石窟を訪ねており、同年十二月「西遊雜信」¹⁹を日本に送り、雲岡と龍門と題して、両者の比較研究を試みており、そのなかで開鑿の年代に關して、次のように述べている。

「雲岡の石窟には年代を徴すべき一の刻銘なきも、龍門の石窟には大抵年代作者及造象の來由を刻せるを以て正確にその時代を徴すべし。其の刻銘の最も古き者は第廿一窟(老君洞)にある北魏孝文帝の太和七年(西紀四七八年、筆者注四八三年の誤記)にして今を距ること千四百四十年前、雲岡の五大石窟に後ること約二十年なり。此の老君洞は孝文帝の經營に成りし者にして其の開鑿は更に此の刻銘より数年を遡るべし。其他の石窟は北魏東魏北齊隋唐の時代に至りて次第に作成せられし者なり」

関野もまた、自分の眼で、老君洞の南壁中央の「太和七年孫秋生造像記」を読みとっているのである。

なお、注目しておきたいのは、関野貞が龍門石窟を再訪した大正七年には、すでに三年前の大正四年(一九一五)

に大村西崖著『支那美術史彫塑篇』が刊行されており、古陽洞の開鑿については、大村自身の拓本の錯読によって、「太和十九年長樂王丘陵亮夫人尉遲造像記」を以て、洞内造像記の最古とみなし、洞の開鑿を、孝文帝の太和十七年（六九三）以降と断定し、それがもつぱら定説化し始めていたからである。大村の拓本による錯読とは、緒論で指摘しておいたように、正壁本尊の敬造年と願文とを記した、南壁の中央の孝文帝洛陽遷都以前の「太和七年孫秋生造像記」と、孝文帝遷都以後に開発された側壁第三層の第二列龕の「景明三年邑子像造像記」が、余壁がないので前者を挟んで上下に刻銘されたために、拓本の上で一つの碑銘と勘違いして、太和七年を第二列龕の造龕が始った年、景明三年は造り訖^{おわ}った年と勝手に解釈してしまったのである。その後も関野の古陽洞開鑿年代観にいささかの変更もないことは、前記の「西遊雑信」をその儘、昭和十三年（一九三八）刊行の『支那の建築と藝術』⁽²⁰⁾に収録していることから伺われる。

ちなみに、大正十四年（一九二五）十月に刊行された常盤大定・関野貞共著『支那佛教史蹟』⁽²¹⁾には、民國二年（一九一三）頃から始った土民による仏顔破壊掠奪後の第

二十一窟（古陽洞）内の大型写真図版十枚が収められており、内二枚に「太和七年孫秋生造像記」の碑銘のある南壁第三層の第二列龕が撮影されている。なお、同図版の説明は、（北魏太和七年造像銘）とのみ記されている。同著はすべて図版のみ収録されており、図版の解説書としては別⁽²²⁾に大正十五年（一九二六）に常盤大定著『支那佛教史蹟詳解』が刊行されているが、常盤は古陽洞の「太和七年孫秋生造像記」については、大村西崖に倣って「景明三年孫秋生等造像銘」と錯読している。

常盤の解説が、図版を提供した関野のタイトルと大きく異なっているのは、かつて常盤自身、六年前の大正九年（一九二〇）十一月九日の「龍門に詣る記」⁽²³⁾で、「老君洞の中に、龍門最古の銘文太和七年の年號がある。最古なるに拘らず、最も緻密を極め、構想も複雑に、至る所に熱烈な信仰心の流露するのは、この窟を以て最とする」と碑銘を自分の眼で読んで感嘆しているだけに残念である。

五、古陽洞を訪れた二人の欧人研究者による調査

1 一九〇七年、エデュアール・シャヴァン
又による龍門石窟の調査と、精緻な碑銘の
解説

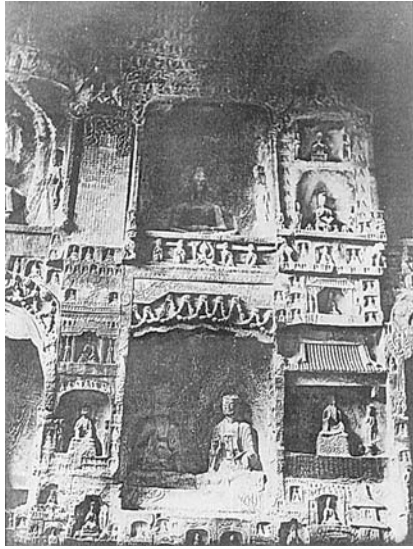
清朝の光緒三十三年（一九〇七）、わが塚本靖・平子鐸
嶺に遅れること一年、フランス人の東洋学者エデュア
ール・シャヴァン又 Edouard Chavannes（一八六五—一九一
八）が、龍門石窟を訪れ、七月二十四日から八月四日に至
る十二日間にわたって、龍門石窟の風景及び石窟内の仏像
の写真撮影とおびただしい数の碑銘の採取を行い、数年か
けてその解説をしている。

シャヴァン又については、同じように國際的な優れた東
洋学者であった石田幹之助（一八七一—一九七四）の記述²⁴
によれば、パリのエコール・ノルマルに学び、公使館員と
して北京に留学（一八八九—九三）、帰國後コレージュ・
ド・フランス教授となり、終生その職にあった（一八九三

一九一八）、という。最も有名な業績は《史記》の翻譯
（三分の二完了）であるが、研究範囲はすこぶる広く、西
域求法の中國僧の事跡、中國來住のインド僧の伝記、仏教
説法、中國美術、漢代碑文、漢晋の木簡釈説、西突厥史料
の訳注など多岐にわたっていた。門下生から敦煌莫高窟研
究の先駆者であるポール・ペリオなどの東洋学者が輩出し
たのも、宜なるかなである。

シャヴァン又は、一九〇七年に華北・東北地域の調査の
旅に出かけ、その成果が『華北訪古記（Mission archéolo-
gique dans la Chine septentrional）』²⁵全四冊であり、一九
〇九年に図版二冊、一九一三年に報告書第一冊、漢代彫
刻、一九一五年に第二冊、仏教彫刻²⁶を刊行している。

龍門石窟に関しては、図版の第二冊²⁶に、伊闕の東山から
写した西山の潛溪寺に始まる石窟群の遠景や、奉先寺を過
ぎた後の南寄りの無数の大小の諸洞を此岸の下から写した
近景など、八枚の写真（NO・278—285）が収められ
ており、続いて賓陽三洞を始めとする各洞内の大寫しの写
真（タテ21センチ・ヨコ4・8センチ）が続くのであるが、
第十洞、老君洞については、洞内の大判写真三十枚（N
O・365—394）に及んでいる。なお、龍門石窟におけ



挿図 一九〇七年古陽洞南壁中央
(E. シャヴァンヌ、第三九一図)

る大型写真は、すべてシャヴァンヌの指示に従って同行の中国人が撮影したものであることを、一九一五年に刊行された報告書第一部の序文の中で断っている。本人が撮ったものは、小判のスナップだけだったという。

さて老君洞、即ち古陽洞内で撮影された写真は、北壁の洞口に近い東寄りの、第二層の弥勒菩薩交脚像の列龕と初層の空洞の列龕が上下に並んだ、最初の第三六五図に始まって、第三層の釈迦仏坐像の列龕とその上の穹窿形天井下方の小仏龕や千仏像を写した第三七九図などがあり、さら

に南壁へと転じている。

ところで、南壁の図版で、逸することができないのは、第三層の釈迦仏坐像の第二列龕とその下の第二層の二仏並坐龕を写した第三九一図であり、第三層のその右の龕側に、奥壁本尊の碑銘である横額状の「太和七年孫秋生造像記」と、それを挟んで上面に螭首に囲まれた「邑子像」の題記と、また下面には上面に続く、維那に率いられた邑子たちの名を記した縦長い碑形が見られる。この図版を見るかぎり太和七年の敬造が明記されている前者と、景明三年に造り訖ると末尾に記されている後者とは、一見して碑面の濃淡及び文字の配列の相異が着取されるのである。横幅が同じでありながら、前者は縦九字・横十三行の縦長い長方形で、文字も大きく、整然として行間にゆとりがあるのに対して、後者は縦十字・横十五行の縦長い長方形で、文字が小さく行間も過密で、雑然とした感じをまぬがれない。同じ角張った方筆とはいえ、両者の優劣は、見る眼には見えてくる。

また、この南壁の中央部を写した第三九一図が、きわめて貴重なのは、拓本の上では知ることのできなかつた「景明三年邑子像」のその造龕を、すなわち第三層第二列龕内

の釈迦坐像と脇侍の菩薩立像二軀の完全な姿を、一九〇七年に写したこの写真を通して、目の当りに見ることができるところである。その後、洞内の数多くの龕内の尊像は、度重なる人為的な破壊を受けており、もはや昔日の面影を偲ぶべくもないのである。

ちなみに、シャヴァンヌの図版に収められた古陽洞内の写真が、如何に貴重であるか、スエーデンの中國美術史家オスヴァルド・シレーン(Osvald Siren)が、十一年後の一九一八年四月に龍門石窟を初訪した際には、古陽洞内の仏像は、既に損傷を受けていたのである。シレーンは自著『中國彫刻』(Chinese sculpture, Text)⁽²⁷⁾の中で、こう語っている。

「中國美術を学ぶ者は、必要な情報や出来のよい複写がすべてシャヴァンヌの『華北訪古記』に含まれていることを知るであろう。それと共に、シャヴァンヌによって紹介された彫刻の多くが、現在部分的に或いは全面的に破壊を被っていることも心に留めておかねばならない。この十年から十二年間に龍門における彫刻の破壊は、そこを続けて訪れた者にしか理解できぬほどの速さで進んでいる。

私も個人的にこれまでの訪問、つまり一九一八年四月と一九二二年一月との間に失われた多くの頭部や全身像に

ついでに観察を記録してきたが、一九一八年に撮影した写真のいくつかは、そんなわけで使えないものになってしまった。もとあつた頭部の一〇パーセントも残っていないように思われる。あとは失われたか、現地の工人の作った余りにもひどい塑造の頭部にすり替えられている」

確かに、シレーンの撮影した写真(第七七 八〇図)を見ると、側壁の列龕内の尊像は言うに及ばず、列龕の周りの無数の小龕の尊像の顔まで破壊されている。また第二層列龕内の弥勒菩薩交脚像の顔面は、気味の悪い玉眼をつけたい白い塑造の顔にすり替えられている。

なお、シレーンは、老君洞の失われた彫刻の顔面の行方について、「このように龍門の彫刻を代表する作例の多くが、もとあつた場所から移され、ヨーロッパ、アメリカ、日本の様々なコレクションに入っている」と結んでいる。

しかし、何はともあれ、龍門石窟調査におけるシャヴァンヌの東洋学者としての本領は、彼が試みた『史記』の翻訳に見られるように、漢語の読解力にあつたと言えよう。とかく見落され勝ちであるが、『華北訪古記』図版第二冊には、シャヴァンヌが龍門石窟において採取した碑銘の拓本は三一〇(NO・437)からNO・747)を数え、さら

に八年後の一九一五年に刊行された報告書第一巻の第二部（仏教彫刻）の巻末には、龍門石窟の碑銘が「伊闕

佛龕碑」(NO・1274)に始まり、清朝末碑(NO・1695)まで、じつに四二二を数える書き起しの碑銘が収録され、本文中にそれらの碑銘の一つ一つに、各洞の説明とともに、詳細な解説がなされている。

龍門石窟については、先達の岡倉覚三や伊東忠太などと同様に、伊闕の風景から説き起し、西山の潜溪寺に対して、対岸の東山にある、詩人白居易ゆかりの香山寺に及ぶのであるが、石窟に関しては、西山の河岸沿いの岩壁に、潜溪寺を入口として約一キロにわたって無数の石窟が穿たれていると述べ、その各論の冒頭を 1. 潜溪寺の囲いの中の石窟 と題して、賓陽洞から始めており、古陽洞については 18. 第十洞・通称老君洞 と題して、八年前に出版された図版の説明と対象の寸法、そしてシャヴァン又自身が採取した拓本の碑銘の詳細な解説が示されている。そのいくつかを書き抜いておく。

「われわれは、龍門石窟中、最も有名な、老君洞として知られている石窟に到着した。この石窟になぜ道教の守護神の名が付けられているのかは不明である。より古い時代

には古陽洞と呼ばれていたようである。この古陽洞という三字が、北壁の奥に彫られている(第三八〇図、下から七〇センチ、左端から四六センチ)。」

なお測量した寸法の単位はミリメートルであるが、センチに直しておく。実測が多いことに驚嘆する。次いで、太上老君像に変容した奥壁の本尊や脇侍の菩薩立像が、如何なる損傷をつけているか、こう述べている。

「この洞は二つの点において損われている。まず奥の大仏について奇妙な修復がほどこされており、それを囲んでいる素晴らしい彫像の真ん中が調和を損って彩色されている(第三九四図右)。第二点は、一九〇一年に洞を閉じるために築かれた積石による壁である(第三八六図左と第六五図右)。この壁は、大きな壁龕に垂直な列をなして、洞の両側を厚く覆っている。」

シャヴァン又は、奥壁の修復された太上老君像によほど抵抗感があつたとみえて、この洞の本尊を正面からは一枚も写していない。彼が素晴らしい彫像と讃えている脇侍の菩薩立像(第三九四図)の左方に、わずかに彩色された太上老君像の右肩と結跏趺坐の右脚、そして台座の覆いが見らればかりである。なお、宝壇の右下に、現在は破壊さ



挿図 一九〇七年古陽洞北壁第三層弥勒菩薩交脚像(É.シャヴァン又、第三七一図)



挿図 一九〇七年古陽洞奥壁老君像右側と右脇侍菩薩像(É.シャヴァン又第三九四図)

れてしまった獅子像が見られるのは、貴重である。ちなみに、前述した南壁中央の「太和七年造像記」は、この挿図の脇侍の菩薩立像の肩先から右へ、僅か五メートルほどしか離れていないのである。

ところで、シャヴァン又は、側壁の構成について、北壁と南壁を上層・中層・下層に分けて、各層の壁龕内の仏像の説明をしているが、上層の列龕の釈迦坐像に対して、ブツタとのみ呼び、側壁中層の列龕で最も魅力的な弥勒菩薩交脚像を、ただ菩薩としか記していないのは、残念に思われる。まだ破壊される以前の、莞爾としてほほえむ面長の顔の弥勒菩薩交脚像の貴重な図版(第三六五、三七一、三七四各図)が遺されているだけにある。その精緻な写真には、『漢風』の交脚像の左膝の上に、形骸化した持瓶が明瞭に看取されるが、もとよりシャヴァン又は、気が付いていない。この持瓶が未耒仏を象徴する香油瓶であることは、すでに第三章第二節で詳述したとおりである。

また洞の天井についても、ドーム型をしていて、小さな方眼状の壁龕が覆っており、その中に幾分大きい壁龕がいくつか挟みこまれている(第三九〇図と第三九二図の上層)とのみ記され、千仏という名稱も、また小壁龕の多



挿圖 拓本「太和七年孫秋生造像記」
(E シャヴァン又<龍門碑銘>No 542)

く見られる弥勒菩薩交脚像の名も一切見られない。

最後に、側壁の列龕内の坐像の法量が示されており、「上層と中層の像は自然な大きさであり、坐像で一・〇五メートルから一・四五メートルである」と記されており、続いて、「洞の幅は六・八〇メートルで、奥行は入口から大仏の台座まで七・七〇メートルである」と洞内の平面が示されている。そして終りは、「以下、私が拓本をとった碑銘を挙げる」という予告で結ばれている。

シャヴァン又自身がとった老君洞の拓本の碑銘は、《龍

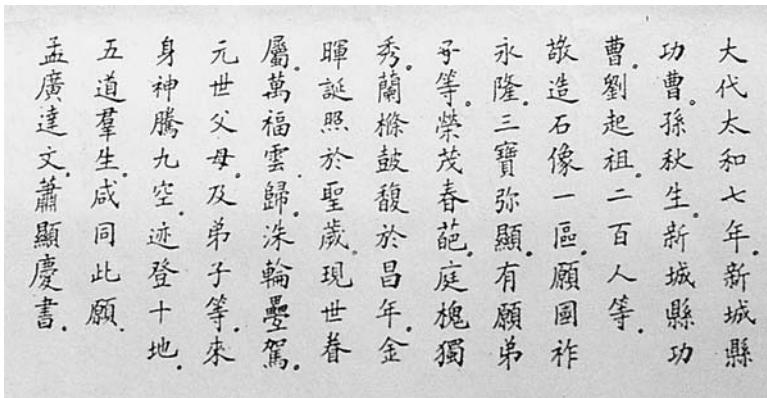
を訪ねた研究者の中では、それ以前もそれ以後も、碑銘の解説においてシャヴァン又に及ぶものはないと言えよう。

ところで、懸案の「太和七年孫秋生造像記」は、本文の《碑銘三八一》(第五四二図、六〇五図)に収録されている。第五四二図はシャヴァン又自身の取った拓本であり、太和七年銘記を真中に挟んで、上面に邑子像の題記と邑主、下面に、維那に率いられた邑子百四十人の名を刻した景明三年の銘記とが、上から下まで連続した縦長い碑拓が取られている。また一六〇五図は、その拓本から書起したものであるが、拓本にあった邑子たちの連名は消去されてい

門碑銘三十三、Estrampaze 32& Fig. 540et 1506)から始まり、《碑銘五八五》で終っている。解説されている碑銘の数は、一一三件、托弧内に示されている二つの数字は、拓本と書起し文のナンバードである。古陽洞だけでも、記述は三十頁に及び、これまでに龍門石窟

る。いずれも八年前の図版に収録されている。シャヴァン
又の碑銘解読の紹介に先立って、シャヴァン又の取つた拓
本から「太和七年孫秋生造像記」の全文を復元しておこう。
なお、印は異体文字（別字）であり、秦公輯著『碑別字
新編』⁽³⁰⁾、さらに羅振璠・羅振玉共著『增訂碑別字字典』⁽³¹⁾に
據つて検出したが、伐や於など「魏孫秋生造象」の出據名
がない別字もみられる。

大伐・太和七年新城縣
功曹孫秋生新城縣功
曹劉起祖二百人等
敬造石像一區願國祚
允隆三寶彌顯有願弟
子等榮茂春葩庭槐獨
秀蘭櫛鼓馥於昌年金
暉誕照於聖現世眷
屬萬福雲歸洙輪疊駕
元世父母及弟子等來
身神騰九空迹登十地
五道羣生咸同此願
孟廣達文蕭顯慶書



挿図 書起し「太和七年孫秋生造像記」(E シャヴァン又<龍門碑銘>No.1605)

この縦九字、
横十四行の整然
と並んだ、異体
文字（別字）十
二を数えるすこ
ぶる難解な漢語
や仏教用語の多
い碑銘を、シャ
ヴァン又は、正
字で書き起し、
次のように読み
解いている。
「太和七年
（四八三）新城
縣民間人雇用監
查官孫秋生、劉
起祖を含む二百
人等が、敬虔に
願いを唱えつつ
石像を作成した。

國の繁栄が永久であるように。三宝が益々輝くように。この祈願を行った信者たちが春の花のように榮えますようにあるように。蘭がその香りを榮光の年月にわたって放つように。黄金の輝きがその光を聖なる世を広げるように。現世の眷属たちが福雲のように彼らの上に集まり、無限の幸福を得るように。彼らが朱色の馬車に乗って多くの供を従えるように。先祖たち、彼らの父母、兄弟たちが、来世で天の九層へと飛翔するように。彼らが十地へと相續いて昇るように。五道の生けるものがこの祈りに加わるように。

孟廣達がこの銘を起草し、蕭顯慶がこれを書いた」

もとより、願文に見られる駢儷体の華麗な語調までは望むべくもないにしても、シャヴァンヌは龍や珠など漢語の一つ一つを採り上げて注釈している。

書起しの銘文の冒頭にある大代（原碑では大伐）については、魏と同義である旨を詳述し、太和七年（四八三）という年紀については、次のように注を付けている。

「それゆえ、これらの造営が始まったのは、洛陽が魏の首都になる以前のことである」

シャヴァンヌは、この碑銘に刻まれた 敬造石像一區

の敬造、を造像の完成と解した上で、古陽洞の開鑿された年代を、孝文帝の洛陽遷都以前のことである、と注記しているのであるが、このことは、おそらくはシャヴァンヌ自身も考え及ばなかったほど、きわめて大きな意味をもっているといつてよい。それは、龍門石窟で最古のこの古陽洞が、北魏の王室とは関わりのない、在地の漢人の官民たちによって開鑿されたということになるからである。

ところで、シャヴァンヌは、大代の代について、代は魏と同じである旨、詳述しているのであるが、在地の漢人の立場からは、果してそれだけにとどまるであろうか。『魏書』⁽³²⁾には、穆帝紀八年の条に「晋愍帝、進帝為代王」とあり、東晋の愍帝（在位三一三—三一七）の時に、鮮卑族拓跋部の酋長が代王に任ぜられ、代・常山二郡が与えられている。その後太祖紀には、登國元年（三八六）正月、拓跋珪、後の太祖道武帝が正月に代王に即位し、四月には魏王に改称し、都を盛樂に定め、さらに天興元年（三九八）六月には國號を魏となし、皇帝と称し、翌七月には平城（大同）に遷都した旨が、記されている。また北辺のこの代郡産の胡馬は、代馬と呼ばれていた。漢人にとつて、代には、胡族への侮蔑感がありはしないだろうか。

古陽洞内のおびただしい数の碑銘の中で、年号の上に、大魏ではなく大代と記されているのは、正壁釈迦三尊像の敬造を記した「太和七年孫秋生造像記」の外には、わずかに正始三年（五〇六）の小龕³³があるだけで、孫大城や楊小妃などの発願者名から推して、正壁本尊同様、地元の漢人による造像であり、胡族支配に対する抵抗感あつてのことではないのか。さらに言えば、大代を大伐と記しているのも、孝文帝の南伐に対する抵抗あつてのことと考えるのは、いささか考え過ぎであろうか。ちなみに、伐が代の異体文字として現れるのは、八十年も後の北齊の太寧二年（五六二）の「雲門寺法懃禅师塔銘」³⁴においてである。

2 一九一八年及び一九二一年、オスヴァルド・シレーンによる龍門石窟の調査と、動揺する古陽洞開鑿年代

スエーデン人の美術史家、オスヴァルド・シレーン *Osvald Siren*（一八七九—一九六六）が、最初に龍門石窟を訪ねたのは、日本の東洋考古美術史家関野貞の再訪より二カ月遅い、一九一八年（民國七年）四月のことであり、シ

レーンもまた、三年後の一九二一年に再訪している。その成果が収められた著書『中國彫刻 五世紀より十四世紀』全四冊（一 本文、二 四、図版）一九二五年、ロンドン、*Chinese sculpture - From the fifth to the fourteenth century*, 4 vols (I-Text, .IV/Plates) 1925, London³⁵に表紙の著者名の下にストックホルム大学教授の肩書が記されている。

なお、シレーンの略歴については、ロンドンから刊行されている著名な美術雑誌『バーリントン・マガジン』一九六六年九月号³⁶に掲載されている追悼記事によつて知ることが出来るが、一八七九年ヘルシンキで生れ、一九六六年六月二十六日にストックホルムで没し、享年八十七歳であった。一九〇八年から二五年までストックホルムの美術史教授を務め、一九二八年から四五年までストックホルムの王立博物館の絵画・彫刻部門の学芸員であったが、シレーンは西洋人による中國美術史研究の黄金期と呼ばれた時代を代表する人物である、と評されている。なお、初期の段階でイタリア美術から中國美術へ転向したという。シレーンの中國美術、とりわけ華北の仏教彫刻への関心については、シャヴァンヌに負うところがすこぶる大きかったこと



挿図 1918年古陽洞太上老君像
(O シレーン撮影)

は、すでに前節において述べておいたところである。

シレーンの龍門石窟に関する記述は、第一冊の本文に、山西篇の雲岡石窟に続いて、河南篇の冒頭にあり、老君洞の総説(二〇 二二頁)と、第二冊図版に収録されている老君洞内七枚の図版(七五図 八一図)の解説から始まっている。圧巻は、これまで道教風のみにもければいい上塗りに辟易して、誰しも撮影することを避けてきた正壁の太上老君像⁽²⁷⁾を正面から撮っていることである。

ところで、シレーンは、この正壁の本尊について、次のように述べている。

「この洞は、四九五年に最初に奉獻された。中尊は結跏趺坐、禪定印を結んだ仏陀像で、完全に厚塗りと顔料で塗り込められているが、特徴のある初期的な人物表現は判然と確認することができる。」(傍点は筆者)

ここで、四九五年というのは、北魏孝文帝の太和十九年であり、孝文帝の洛陽遷都後二年目に当たっている。シレーンは、前頁の総説においても、龍門で最古の洞は、北魏の都が大同から洛陽に移されて間もなく、帝室の命にもとずいて開鑿されたとしながらも、こう言っている。

「しかし、それ以前にすでに石窟造営が始まっていた可能性もある。なぜならば、孝文帝造営の石窟である老君洞には四八三年の銘が確認されているからである。しかしながら、これは年代的に非常に離れている。この洞の大部分の紀年銘は、ずっと後の唐代の追加部分を除けば、四九五年、五四五年の間のものである。」(傍点は筆者)

四八三年は、太和七年であり、言うまでもなく古陽洞正壁の釈迦本尊が敬造されたことを銘刻している。「太和七年孫秋生造像記」の紀年である。シレーンが心酔していたシヤヴァンヌが、『碑銘三八一』において意を盡して解説したこの太和七年の造像銘を、なぜ彼は疑わなければなら

いのか。また何よりも彼自身が、太上老君像の図版の解説の中で、中尊はまぎれもない仏陀像であるとして、「特徴のある初期の造像形式（Form）は判然と確認することができる」と言っているにも拘らずである。正壁本尊が如何なる時代の様式（Style）なのか、その表現形式と碑銘の紀年とを対応させ、検証することが、彫刻史研究者としての本領ではないのか。すでにシレーンは、雲岡石窟を調査している。太上老君像の加飾の下の釈迦本尊の造像が、雲岡石窟に見られたすこぶる特徴的な「胡風」に相通つものがあるのか、あるいはその影響が全く見られない「漢風」そのものであるのか、見分けはついたはずである。

それにも拘らず、古陽洞の開鑿年代に關してすこぶる曖昧なのは、なぜなのか。私は最近にたまたまシレーンの著作全4冊が刊行された一九二五年に添えられた序文⁽³⁸⁾の末尾にある、左の記述を読み、シレーンに対するこれまでの不審な思いが、一挙に氷解するのをおぼえた。驚くべきことには、本稿の緒論において指摘しておいた大村西崖が拓本の上で犯した碑銘錯読が、中國語も日本語も読めないシレーンにまで、影響を及ぼしていたのである。シレーンは次のように告白している。

「私はA・ウエイリー氏にもお世話になった。同氏は中國彫刻に關するオオムラの日本語の著作からの彼のノートを利用する便宜を、私に与えてくれたのである。」（傍点筆者）

中國彫刻に關するオオムラの日本語の著作というのは、もとより一九一五年に刊行された大村西崖の名著『支那美術史彫塑篇』にほかならない。その中から抜粋した英訳のノートをシレーンに借したA・ウエイリーは、英國の東洋學者として日本においてすこぶる著名なアーサー・ウエイリー（Arthur David Waley, 1889-1966）であることは言つまでもない。

ウエイリーについては、オックスフォード大学出版局刊行の『國民人名辞典』一九六一年一九七〇年（一九八一年）⁽³⁹⁾の記事が、もっとも簡にして要をえているが、ウエイリーは一九一三年六月に大英博物館員となり、中國と日本の文書や絵画部門を担当するとともに、中國語と日本語の文藝作品の翻譯をしている。日本關係の訳書としては、『日本の詩歌』（一九一九年）、『日本の能』（一九二二年）、『源氏物語』（一九二五年刊行開始）など、私たちの知っているものも少くない。こつしたウエイリーから大村西崖の

龍門石窟の碑銘の訳が伝えられることも大いにありえよう。もっともシレーンは、シャヴァンヌによって龍門石窟に

開眼されながらも、石窟の碑銘にはほとんど関心がなかったのが、彼の古陽洞内の図版には、碑銘の写つたもの一枚もない。古陽洞の開鑿年代に關して、定見を持ちえない所以である。ちなみにシレーンより二ヶ月早く一九一八年二月に古陽洞を調査した関野貞は、南壁中央の「太和七年銘孫秋生造像記」の碑銘を、正確に読みとるとともに、碑銘のある壁面の撮影を行っている。自分の眼で、碑銘を確かめようとしなかつたシレーンの調査が惜しまれるのである。

注

- (1) 『岡倉天心全集』別巻(一九一八年七月、平凡社刊)年譜三九五頁、三九四、三九六頁。期間は七月十五日より十二月七日まで。
 - (2) 前出『岡倉天心全集』第五巻、一五、一一四頁。手記の假題は「支那旅行日誌」。期間は、明治二十六年七月十一日より同年十一月三日まで。
- なお、日本美術院所蔵の同手記の閲覽と写真撮影について、平成十七年九月十九日、同十八年八月一日の両日、同

院の事務局長鈴木嗣郎氏と担当者重田有子さんにお世話になつたことを深謝する。

- (3) 劉昉等撰『舊唐書』卷百六十六、列傳白居易(中華書房刊)第一三冊、四三五六頁、四三三八頁。
- (4) 前出『岡倉天心全集』別巻、年譜三八四頁、三八七頁。
- (5) 日本美術院所蔵、昭和六十二年三月五日、同院の奥村義三理事長及び小沼新六事務長の厚意で閲覽と撮影。前出『岡倉天心全集』第八巻、「奈良古社寺調査手録」二二頁。
- (6) Ernest F. Fenolossa: Epochs of Chinese and Japanese Art, Vol. I (New York and London, 1912) P.50.
- (7) 法隆寺蔵『法隆寺明治十九歲録古文書務所』の五月七日の箇所に、「一、五月七日午前十二時頃文部省御傭人米國フエノ口サ氏全圖画取調掛り岡倉覺三外三名及加納鐵哉氏隨行名登山有之、寶器并佛体其外諸堂等荒増模写シ午後五時過帰南有之候事」と記されている。昭和六十二年一月九日、法隆寺寺務所にて高田良信執事長の厚意により、明治年間の寺務日記を閲覽。
- (8) 前出『岡倉天心全集』別巻、年譜三八四、三八九頁。
- (9) 岸田日出刀、建築学者伊東忠太(昭和二十年、乾元社刊)四三頁。
- (10) 伊東忠太「支那印度土耳其旅行談(第二回の下)」、『建築雜誌』第二百四十号(明治三十九年、日本建築学会刊)七

八二頁、七八三頁、第三十六圖。

- (11) 伊東忠太『東洋建築の研究』(上)、『昭和十八年、龍吟社刊』一七〇頁。
- (12) 塚本靖「清國內地旅行談」、『東洋學藝雜誌』第二十五卷第三百二十一号、明治四十一年六月五日期) 四〇二〜三頁。
- (13) 塚本靖「雲岡と龍門」、『太陽』第三十一卷第八号、大正十四年八月刊) 三四 四十頁。
- (14) 塚本靖撮影「古陽洞内図版」第八十九図坐佛龕(左壁第三層第一龕)、第九十一図左壁上層、第九十二図右壁上層、第九十三図交脚菩薩龕(右壁第二層第龕)(前出水野清一・長廣敬雄著『龍門石窟の研究』所収)。
- (15) 平子鐸嶺筆『長安洛陽佛蹟探檢手記』(明治三十九年)三冊(東京藝術大学図書館所蔵、貴重図書)、二〇〇四年五月一〇日、二〇〇五年一〇月二〇日閲覧及び撮影。
- (16) 『中國石窟・鞏縣石窟寺編集委員会監修』中國石窟 鞏縣石窟寺、一九八三年平凡社刊) 安全槐「序説」一八七頁。
- (17) 『鐸嶺平子尚先生著作年表・略歴』(一九七四年、発刃会刊) 所収。
- (18) 関野貞講演「清國河南陝西旅行談」明治四十年二月二十日於東京地理学協會(関野貞著『支那の建築と藝術』昭和十三年九月、岩波書店刊) 所収六〇七頁。
- (19) 関野貞「西遊雜信」一、『建築雜誌』第三二輯第三八四号、大正七年十二月刊) 六二六頁下段。なお、前出、関野貞著『支那の建築と藝術』にも所収、六五四頁。
- (20) 関野貞「西遊雜信」上、支那の部、雲岡と龍門(前出、『支那の建築と藝術』六四五頁)。
- (21) 常盤大定・関野貞共著『支那佛教史蹟』二(一九二五年、仏教史蹟研究會刊) 91龍門第二十一窟(古陽洞)南壁上層第三佛龕。
- (22) 常盤大定著『支那佛教史蹟詳解』(一九二六年、仏教史蹟研究會刊) 一〇五頁。
- (23) 常盤大定著『支那佛教史蹟踏査記』(昭和十三年、龍吟社刊) 所収「古賢の跡へ」九八頁。
- (24) 『世界百科辞典』(一九六五年、平凡社刊) 10、五四〇頁。シヤヴァンヌの項、石田幹之助の記述に據る。
- (25) Edouard Chavannes, La Chine septentrionale, Planches, Deuxième Partie. (Paris, 1909.) Tome 1
Première Partie. (1913)
Deuxième Partie. (1915)
- (26) 同 Planches, Deuxième Partie 1909, Pl. CLXI-PCOLL.
- (27) Osvald Siren: Chinese sculpture, Volume I, Text, (London, 1925.) P20
- (28) 前出 Edouard Chavannes: Chine Septentrionale, Tome I, Peuxième Partie, La Sculpture Bouddhique, P472.
- (29) 同 P479.
- (30) 秦公輯『碑別字新編』(一九八五年北京・文物出版社刊)。

- (31) 羅振鋆・羅振玉著『增訂碑別字字典』(一九七六年 省心書房刊)「碑石分類別字索引」七頁。
- (32) 魏収撰『魏書』序紀第一穆皇帝八年(中華書局)第一冊九頁。
- 同、太祖紀登國元年正月、第一冊二十頁。
- 同、太祖紀天興元年六月、七月、第一冊、三一一—三三三頁。
- (33) 大村西崖著『支那美術史彫塑篇』(一九一五年仏書刊行会図像部刊)二〇二頁。
- (34) 『漢魏南北朝墓誌集釋』法勳禪師墓誌、図版三二八。
- (35) Oswald Siren; Chinese Sculpture—Form the fifth to the fourteenth century—, volume I: Text. (1925; London.)
- (36) William Watson; Professor Oswald Siren (The Burlington Magazine, volume cv , Number 762, September 1966, London) P.484.
- (37) 龍田 Oswald Siren; Chinese Sculpture, Volume1: Text. P.21, plate 75.
- (38) 序 Preface viii.
- (39) The Dictionary of National Biography 1961-1970 (Oxford University Press, 1981) P.1043

結び

敬愛するE・シヤウマン又は、龍門石窟に関する記述のはじめに、西山の潛溪寺に近い審陽洞など重要な石窟が、いずれも

東を向いており、日の出の時には「あたかも賓客を迎え入れるように、太陽を迎え入れる」と書いている。

一九九九年の十月末、二十年ぶりに訪れた龍門石窟で、朝の光が眩しいばかりに溢れていた古陽洞の洞内に立ったときの感動なしには、この論文は生れることはなかったのである。半日心ゆくばかり洞内を調査する機会を与えて下さった龍門石窟研究院の諸先学に、衷心より感謝したい。

また、その後この拙論の執筆に際して、数々の教示と励ましを戴いた友人や卒業生に、さらにはその成果を『成城文藝』に寄稿するように懇懇してくださった戸部順一文藝学部長並びに編集委員の皆さんに、深謝してやまない。

なお、故事に倣って云えば、願わくば、古陽洞の美を礼讃してやまないこの拙文が、いつの日にか、洛陽の紙價を高くらしめたことを、である。

龍門石窟古陽洞の開鑿年代(上) 正誤表

誤 正

2頁上段2行	西戒の地	25頁上段14行	交脚像である。	交脚像であり、
" " 19行	龍門石窟前所長	26頁上段16行	説説印	説法印
" " "	劉景龍氏訪問	32頁下段17行	『新旧約聖書』	『旧約聖書』
4頁上段11行	こう呼とも	34頁上段11行	雲岡窟	雲岡石窟
4頁下段5行	「太和七年龕造 佛記」にも	36頁上段7行	バクダツト	バグダツト
8頁下段10行	塚本靖によって	36頁下段16行	弘文帝	孝文帝
9頁下段3行	が大部分を占め	37頁下段5行	帔巾 <small>ひもと</small>	帔巾 <small>ひもと</small>
14頁下段18行	教帝崩御後に	38頁下段17行	第二八五窟の	第二八五窟頂の
15頁挿図8	東山より下流の	38頁上段挿図②	天地が逆	
" 下段9行	瓦葺の南葺	39頁上段4行	麻尼	摩尼
" 下段16行	差支えであろう	" " 2行	密實陽中洞	實陽中洞
17頁下段14行	裳階 <small>もじろ</small>	" 下段7行	華奢であり	華奢であり
19頁上段14行	淨瓶	" 下段16行	キージル	キジール
" " 17行	"	41頁下段2行	(田稱)	(旧稱)
" 下段2行	でである			
21頁上段3行	アットリビート			
	アットリビート			